
自解100句選 品川鈴子集

品川鈴子



扉の鋏は大、羅の乳房より

「天狼」作家として励んだ三十～四十歳代の句業。

さまざまな表情を見せる句と自解、評言から
俳句界全体の活撥な営み、熱気が伝わってくる。

昼ひるの月つき淡あわし少女しょうじ期よきいつか過すぐ

昭和28年作

四国の女学校を四年で了えたとき、いちど連絡船に乗ってみようかと、物見気分ものみで試験を受けたら神戸女子薬専に入ってしまう。早生まれはやまの十六歳には寄宿舎きゅうしよは淋しく、都会にはなじめず、同級生も二、三歳年上で、理系だけの授業では味気なく、独り詩歌帖を作っていた。旧制女専の最終回として三年で卒業。国家試験もすぐ通ったものの薬事法では未成年には薬剤師免許が下りず、おあずけのまま住友化学へ入社した。そんなわけで、小柄こがらでおくでの私は、どこへ行っても子供扱いばかりだった。

「白燕びやくえん」の五周年大会が神戸海員会館であったとき、主宰の橋間石先生の特選になり、賞品しょうひん（灰皿）と短冊を貰う。「生きものの眼の濡れてをり少女の前聞石」。他にも一句入選した。

磯の香や春星半球面に満ち

入門後一年余り。やっと認められて二十一歳の私をこの道に繋ぎ留めた句で、句業の第一歩となった。

三十一年の白燕大会の佳作入選句は、

体臭たいしゅうに海拔かいぱつ一〇〇〇の藤震ふじふるふ

季語 11月

新婚のすべて未知数メロン切る

昭和37年作

三十六年秋に結婚したが、相手の大学助手の薄給では、当然の共稼ぎ。化学分析しか知らぬ者に厨は驚きの場で、厨俳句が次々生まれる。私達の新婚は巨きな心配事を抱えて、むしろ欲びよりも不安の未知数だったけれど、数種の歳時記に選ばれた句です。

ハネムーンキャベツを針のごと刻む 37年

軋む莢豆ステンス流し台 39年

この二句は朝日新聞夕刊「お台所メモ」に起用された。

つとめ妻玉葱にすぐ涙ぐむ 37年

アパートの二間貫く蟻の道 //

換気扇秋刀魚焼く煙早く吸へ 41年

それまで、互に広い家で暮らしたのに、豊中岡町の新居は六畳二間に板間の台所三畳、小さな風呂、便所だけ。嫁入道具がトラック二台分入ると、身動きもならない。大切な師の句皿を飾ると、「ヒットラーの靴を、戦時は床に飾った者がいた」と言う。靴と同格とは許せず、激しく泣く声が、棟割十軒へ筒抜けの初喧嘩。割れない内に蔵わせる魂胆だったとか。

季語Ⅱメロン

水中花すいちゆうかいつまでも咲く子なき家いえ

昭和40年作

ほんの駆け出しの医者が、ふいに死亡率も再発率も抜群に高い病に襲われた。大抵は助からぬところを、たまたま自分の専科だったのでいち早く切除したが、再発が恐ろしい。子供が出来なくなるのを承知で、多量のX線レントゲンをかけた。まだ婚約もしない頃のことである。苦境に陥った人を何とか支えてあげたくて、周圀には病を伏せて婚約。

恋雀婚約のこと父母知らず

新婚の日々もまるで薄氷を踏む思いであったが、無事に三年が過ぎた。高槻にやつと小さな家を構え、十四年間勤めた会社を辞めた。専業主婦になつてみると、何か虚しく淋しくて、殊更に主人の病気が案じられた。

山口誓子先生に依つて処女句集の名に選ばれ、その序文で波津女夫人は「私も鈴子さんと同じやうに子供を恵まれなかつたものですから、これ等の御句が私の心に響きました」と書いて下さった。

いつまでも泡を離さぬ水中花 52年

水中花開きし花の天地人 54年

『水中花』・季語Ⅱ水中花

火口湖が凍る真白き亀裂もち

昭和41年作

「天狼」の正月号ではじめて巻頭となり、関西俳人協会の大会でも誓子先生の特選を頂いた句。選評はへ火口湖が凍つてゐる。一枚の氷だ。蒼みがかつた氷だらう。それにひびが走つてゐる。その真白いひびは蒼い氷に一線を引いて、寒さのきびしいことを表はしてゐる。「真白き亀裂」が凍つた火口湖が強いアクセントをつけてゐるのだ」と書かれた。

陸奥へ独り作句に行つたのは、前年の五月下旬。蔵王は雪の切通が開通したばかり。

垂直に切りし雪壁バス通す 41年

私だけに乗せたバスが山頂に着き、膝上まで没する雪を踏み分けてゆくと、
“お釜”と呼ばれ滅多に見られぬ火口湖が、ぼつかり瞰みえた。

降りつもる雪に火口もただの穴 41年

雪つもる火口湖の芯青く凍て ”

滝壺に接して厚く雪を積む ”

雪を手を掴み北國たしかむる ”

北國に触れて自分自身をも確かめる旅をした。 『水中花』・季語Ⅱ凍る

八方へ別るをけら火廻しつつ

昭和41年作

初案は「八方へ岐る……」だったが句集を編む折に変更。この頃の数年間には、古都等の、伝統的な行事俳句に対して、新しい観方を試みた。

をけらは「白朮」と書く漢方薬で、お屠蘇にも入っているが、食欲増進や強壯剤としての働きがあるので、無病息災の邪気祓いにする。根茎の干皮は紐のようなもので、それに神前の火を点して帰る。

京都から高槻まで、自家用車の中は煙たいけれども芳しい小半時であった。句帖に灰が挟まっていた。

早く廻るは青年のをけら火よ

をけら火の円描く祇園露路深く

「天狼」（四十一年四月号）に誓子先生が〈除夜に京都の八坂神社で「をけら火」を売る。それを持つて帰つて初籠の火とする。私なども少年の頃、それを持つて岡崎の家まで歩いて帰つた。あの火は手でぐるぐる廻してゐないと消える。人々はをけら火を廻しながら、家々のある市内の八方へ帰つて行く〉と述懐された。

『水中花』・季語Ⅱをけら火

木偶にいま魂入りて初芝居

昭和59年作

大阪は径頓堀の朝日座では文楽公演の最終回。次には新しい国立文楽劇場の柿落だが、昔なじみの芝居小屋を惜しんでの観劇。法事などの折にしか顔を合わせることに無い母方の従姉が、なかなかの文楽通で、ふと誘われた姉と私。それぞれ奈良、大阪、神戸から馳せ参じて久闊を温めた。

頭の他は衣裳だけで実体の無い文楽人形が、竹本越路太夫の浄瑠璃につれ、木偶遣いの手にかかると、突如魂が吹き込まれて、喜怒哀楽をまことしやかに演じる不思議さ。吉田文五郎はじめ名手といわれる遣い手は、まこと魔法つかいである。しやつきりとした木偶の起ち居振舞いを観ると、素より魂を持つ吾々こそ、背筋をしゃんと正さねばと、木偶から教えられる年頭でした。正月十九日・十時四十五分の開演に、ひよどり台は大雪のため遅参した。

初芝居 浄瑠璃本をおしいたゞき 59年

初文楽 内輪で歩く姫遣ひ //

惚れ木偶が笑ひを誘ふ初芝居 //

『漠』・季語Ⅱ初芝居

太古より銀河を支ふ円柱

昭和59年作

第二句集の代表句として帯にへ詩人の翼を駆りたて、遙かな天空より照射された日常性は、宇宙的ダイナミズムに充ちた、新しい時空となって、我々の前に立ち現れる」と紹介された。エジプトは神々の国。ナイル川の畔には、五千年の古代神殿が遺る。殊にカルナック大神殿は巨きな円柱（径三・六メートル、高二五メートル）が林立する。この間に入り込むと、人はいかにも小さい。円柱の頂部は、パピルスの花のように天へ向かって開いた柱列があるかと思えば、又蕾を象った未開花。パピルスの柱頭の列など。いずれも下の方がふつくと膨らむ巨大円柱には絵や文字が刻まれ、永い永い時が流れ去って、天井の失せた柱の先には限りなく澄んだ空だけがある。日没を待つてここで古代神話の野外劇が繰展げられ、石の神殿に、当時の神々が登場すると、もはや時は太古へと静かに逆流する。悠久を想うお正月でした。

スフィンクス欠けたる頬に初明り 59年

『漠』・季語Ⅱ銀河

涅槃ねはん 凶ずの跡あとをさする一人ひとりあり

昭和59年作

足の裏は第二の心臓とも呼ばれ経絡けいらくのつば等も多くて、跡をさすれば活力が湧くと言われている。涅槃に馳せ参じた衆は、みな釈迦の死を嘆き悲しんでいるのに、一人だけ尚その死を諾うべなわず、復活を信じて跡をさすっている者。私はこの人物に強く魅かれる。アサヒグラフ増刊「女流俳句の世界」(六十一年七月刊)に沢好摩氏が「女流俳句のニューウエーブ」として推された句。涅槃図は見れば見る程、多くの事を想わせてくれる。

涅槃 図を脱け 仰向けに 鳩死ねり 44年

涅槃 像 吾を薄目に みそなはず //

死 因いぶかし 涅槃 像たくましく //

悲しみの情景にぶつかって句作する時、人一倍情に脆もろいことを自分で解っているのに、心を鬼にして情を排除する。私はなるだけよく見つけて、物を掴み出す。表現した物と物の間から、情が伝わってくる事を望んでいる。

両親の死に直面したときがそれだった。

『漠』・季語Ⅱ涅槃図

踊太鼓打ちて二の腕までが撥

昭和59年作

太鼓は音色とリズムの変化だけで音楽を作り、その表現が直接的だから血を騒がせる。

昔は険阻けんそだった鴨越にも宅地が拓ひらかれて、ようやく公園で行われた盆踊り。初めは踊りと唄がてんでんばらばらで、あまり氣勢のあがらぬ宵だった。しばらくして、長身の男が踊櫓に現われると、やおら白耕の袖を肩までたくし上げ、颯爽と太鼓を打ちはじめた。或は強く、又低くと巧みな撥さばき。全身全霊で打つ響きは、団地を越えて、たたなずく山々にも響したました。

その調べに誘われて、引き込まれるように踊りだす老若男女に踊りの輪はみる膨らむ。

昔々、あるところに踊太鼓の名手がいいて、その調べは天上にまで届き、とうとう天女に懸想されてしまったそうな。へ踊太鼓を打つ力の配分も大変なもの。遅く速くと、懸命に踊を引立てる。隆々としたこの腕も音の原動力、その腕を撥と見た鋭さに重量感がある。岩村森子氏評「ぬかご」（六十一年二月号）

『漢』・季語Ⅱ 踊

植^{しよく}物^{ぶつ}園^{えん}

いつもどこかで落^{おち}葉^ば降^ふる

昭和59年作

園^{えん}丁^{てい}の仰^{ぎやう}臥^がを許^{ゆる}す菊^{きく}日^び和^{より}

読売新聞社の『花の歳時記』に収録された句です。植物園は須磨離宮の本苑とは陸橋で結ばれるが、本苑の欧風で開放的なのに較べて、こちらは樹木が鬱蒼と茂り、街騒もとどかず深川幽谷の趣き。その奥庭の数寄屋造りの部屋を借りて阪急文化教室の吟行をした。誓子先生の案内役とし園内を巡った折、先生の句作を妨げぬように、数歩下って黙ってお伴をする。あちこちで落葉する気配の小径。落葉降る音だけの閑かさ。二句とも特選を得た。〈植物園は動物園とちがって、子供が少なく、静かなゆえに、いつもどこかで降る落葉の動きが大きな注目となる〉へもの根元をを説明してゆくような感性がひかる〉和田悟朗氏評「俳句研究」(84・85年鑑)

うろこ雲植物園に松患^{わすら}ふ 41年

菊花展裏に簀^{かむ}圍^ひひ廁^{かむ}あり 59年

前髪を寄せて厚物咲を見る //

『漠』・季語Ⅱ落葉

著者略歴

品川鈴子（しながわ・すずこ）
昭和7年、愛媛県新居浜市生まれ。
昭和26年、神戸女子薬学専門学校（現神戸薬科大学）卒。俳句と連句を橋間石に入門。
昭和33年、山口誓子に俳句を師事。
昭和41年、七曜賞受賞。
昭和60年、ひよどり連句会主宰。
平成元年、「現代芸術賞」半どんの会（兵庫県文化団体）受賞。
平成6年5月、俳誌「ぐろっけ」創刊、主宰。
平成9年度「神戸文化活動功労賞」受賞。
日本文藝家協会会員。俳人協会評議員。連句協会副会長。兵庫県俳句協会理事。国際俳句交流協会会員。
句集に「水中花」「漢」「鈴蘭」「真澄」「船出」「六香」「鱈」「自註現代俳句シリーズ 品川鈴子集」「鈴の緒」（合同句集）。ほかに「薬草歳時記」、「去来抄」とともに——俳句と連句を知る」（ウエブ刊）、「鈴子の鈴語り」（神戸新聞総合出版センター）などの著作がある。

ウエブ俳句新書

自解100句選 品川鈴子集

二〇〇七年十月三十日 第一刷発行

著者 品川鈴子

発行 ウエブ

〒一六〇〇〇三二 東京都新宿区新宿一―二四―一―909

TEL〇三(五三六八)一八七〇

FAX〇三(五三六八)一八七一

振替 〇〇一四〇―七―五四四二二八

発売 三樹書房

〒一〇一〇〇五一 東京都千代田区神田神保町一―三〇

TEL〇三(三三九五)五三九八

FAX〇三(三三九一)四四一八

印刷 東京印書館

定価はカバーに表示してあります

©SUZUKO SHINAGAWA

ISBN978-4-902186-48-2

ウエブ URL <http://www.3749.com/wep/> E-mail BCB10324@nifty.com
三樹書房 URL <http://www.mikipress.com>